原著論文

特別支援教育センター研究紀要，12，13―22（2020）

知的障害があり，行動問題がある自閉スペクトラム症者への母親の関わり方変容プロセス研究※

－母親へのインタビューを通して－

黒　木　八恵子※※

本研究の目的は，一時期行動問題が激しかったが，現在（インタビュー当時）は比較的状態が安定している，知的障害があり行動問題がある自閉スペクトラム症の子を持つ母親へのインタビューを通して，母親の子どもへの関わり方の変容プロセスを明らかにすることである。6名の母親にインタビュー調査を実施し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果，母親は，【子どもに合った対応を追求する】，【子どもが安心する対応を理解していく】，【子どもに合った対応を認識していく】という《子どもに必要な関わりが分かっていく》を何度も何度も繰り返すことによって，【生活しやすさを培う】に至ることが明らかになった。また，これらは，【拠り所がある】に下支えされていたことが明らかになった。

キー・ワード：行動問題，自閉スペクトラム症，母親，関わり方

Ⅰ　はじめに

自閉スペクトラム症（以下ASDと記す）とは，コミュニケーションや言語に関する症状があり，常同行動を示すといった様々な状態を連続体として包含する診断名である。ASD者の中には，家庭や学校，施設，または地域社会において，様々な行動問題を示す人が少なくない（村本・園山，2009）[6]といわれている。他傷や自傷，衝動・多動性，強迫的行動，かんしゃく，感覚過敏等といった症状がみられ，これらは，ASD者と暮らす家族の生活に深刻な混乱をもたらす（柳澤，2012）[14]。また，家庭場面の行動問題は，養育や家庭生活および地域生活の困難を招き，ひいては本人を，より制限のある環境へと隔離する主要な原因であり続けている。そのため，行動問題があるASD者本人と家族に対する支援は，緊急な課題である（藤原・平澤，2001）[2]ことが指摘されている。さらに，ASD者が示す行動への理解や対応の難しさは，家族全体にわたって共通した課題であり，家族の心理的な負担と強い関連性があることがうかがえる。このため，ASD者の家族に対しては，ASD者の行動や特性とそれらへの対応方法に関する適切な情報，また，それらについて学ぶ機会を提供することが必要である（柳澤，2012）[14]。このような中，行動問題があるASD者をもつ家族への介入に関しては，以下のような研究報告がある。

安達・古川（2003）[1]は，行動問題を示すASD児をもつ母親との面談を通じて，応用行動分析やTEACCHプログラムのアイディアに基づいたアドバイスを行った結果，行動問題が一定程度改善した事例について報告している。竹井ら（2009）[12]は，行動問題を示すASD幼児とその母親に対して，機能的アセスメントを用いて，包括的な支援計画を立案・実施している。その結果，行動問題が減少し，母親との適切な相互作用が増加したことを報告している。上野・野呂（2011）[13]は，ASD児と母親に対して機能的アセスメントを実施し，適応行動の機会設定とトークンシステムの利用を行った結果，行動問題は低減し，母親との適切な相互作用の増加が示唆され

※　The process of transformation in the relationship between mothers and their children with Autism Spectrum Disorder with mental retardation and behavioral problems -Through interviews with mothers-

※※　北九州市発達障害者支援センター

たと述べている。末永・小笠原（2012）[9]は，自傷や物壊し等の行動問題があるASD児に対して，機能的アセスメントに基づき，自己管理手続きを導入している。その結果，望ましい行動は増加し，また，保護者による記録を導入してからは，行動問題の大きな抑制がなされたと報告している。河内ら（2015）[3]は，うつ病のある母親が行動問題を示すASD児に，絵カード交換式コミュニケーションシステム（以下PECSと記す）を用いた関わりに対する介入を行っている。適切な要求と終了の行動を形成することで，行動問題は減少したと述べている。岡本（2015）[7]は，行動問題を示すASD児の保護者と教師との連携方法として，協議ツールの有効性について報告している。協議ツールは４つから構成されており，それらを活用することによって，家庭文脈に適合した支援を提供することが示唆されたと述べている。岡村（2016）[8]は，ASD児に対して，高いストレスをもつ母親が，機能的アセスメントに基づく介入を家庭で実行するための支援について報告している。行動記録に基づく保護者の強みを強調する支援アプローチを行った結果，母親は行動問題の先行事象や結果事象，介入方略を自発的に語ることがみられ，行動問題は減少した。また，子どもや母親の肯定的な評価や望ましい関わりについての語りもみられだし，母親の精神的健康度が上昇したと述べている。前田ら（2017）[5]は，行動問題を示すASD児の母親に対して，主体的な支援改善や調整を行うために有効な記録様式と，母親の行動変容の過程について検討している。その結果，子どもの行動のみを記録する条件よりも，子どもと母親の両方の行動を記録する条件において提案された介入が正確に実施され，子どもの行動問題が低減したと報告している。

また母親へのインタビュー調査による研究としては，李木（2003）[10]と鈴木ら（2015）[11]の報告がある。李木（2003）[10]は，20代前半の男性の母親１名へのインタビューを通して，行動障碍にまつわるエピソードを取り出し，子育ての物語を構成している。子どもの示す行動障碍は，初期の段階は障碍によってもたらされた行動が中心であったが，次第に社会的な意味を持った他者との関係で生じた行動に変化した。そのため母親は，子育ての方法を変え，専門家にも協力を求めようとしたが，うまくいかなかった。専門家とよい関係が作れた時期には，子どもにも成長が認められたと述べている。鈴木ら（2015）[11]は，ASD者をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素を明らかにするために，16歳以上のASD者をもつ母親へのインタビューを行い，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTAと記す）を用いて分析している。母親は親意識と自己効力感によって動機づけられ，子どもの特徴理解を踏まえて対応策を考え，社会的支援を活用し，子どもの特徴や社会的支援に基づき成り行きを見通すことで，子どもを取り巻く問題に対する対処を導き出していることを報告している。

以上のように先行研究の多くは，学校や大学等の専門機関と家族との協働による取り組みや行動分析の手法を用いた研究である。鈴木らの報告は，知的障害があるASD者のみではなく，また，母親の思考過程を対象としている。知的障害があり，行動問題があるASD者をもつ母親の子育てに関する研究は，ほとんど見当たらない。しかし，前述したように，行動問題があるASD者本人と家族に対する支援は喫緊な課題である。厚生労働省においても平成25年度より，強度行動障害を有する者に対する支援を適切に行う者を養成する「強度行動障害支援養成研修（基礎研修）」を創設している。

筆者の職場においても，激しい行動問題のために家庭生活が維持できなくなり，病院へ入院もしくは施設入所するケースが複数ある。また，入院や入所施設を利用していない場合でも，本人が示す様々な行動問題のために，家族が疲弊しているケースは少なくない。しかしその一方で，知的障害があり行動問題があるASD者が，一進一退するものの，少しずつではあるが比較的安定していく様子を目の当たりにすることもある。そこで，本研究においては，一時期行動問題が激しかったが，現在（インタビュー当時）は比較的状態が安定している，知的障害があり行動問題があるASDの子を持つ母親へのインタビューを通して，母親の子どもへの関わり方の変容プロセスを明らかにすることを目的とする。行動問題があるものの比較的状態が安定しているという，成功事例の母親の子育てのプロセスを学ぶことは，今後の家族支援を考えるうえで多くの示唆を与えてくれる

ものと考えた。また，比較的安定とは，行動問題が全くないわけではなく，そのために家族に多少影響があるものの，家族の生活に対して非常に支障をきたしているわけではないことを意味する。

Ⅱ　研究方法

1．調査対象

分析対象者は，2017年12月段階で，一時期行動問題が激しかったが，現在（インタビュー当時）は比較的状態が安定している，知的障害があり行動問題があるASD者を持つ母親（6名）であり，インタビューを用いる半構造化面接を行った。インタビューの期間は，2017年12月から2018年2月であり，時間は1人1時間から4時間であった。調査協力者の基本属性については，女性6名で，インタビュー時の年齢は，40代2名，50代3名，60代1名であった。また，子どもの年齢は，16歳から36歳であった。

2．倫理的配慮

調査協力者には，研究目的・個人情報保護・データの取り扱い・同意取り消しの権利について口頭および文書で説明を行い，協力への同意を文書で得た。また，協力者の了解を得て，インタビュー内容はICレコーダーで録音を行った。分析および調査結果の公表段階において，個人が特定されないように配慮した。

3．分析方法

本研究では，M-GTA（木下，2007）[4]を用いて分析を行った。本研究は，母親と子どもとの間の相互作用と深く関連し，知的障害があり，行動問題があるASD者への母親の関わり方変容プロセスを明らかにすること，その結果から支援のあり方を検討することを目的としている。そのため，相互作用性およびプロセスを構造的にとらえる分析に優れており，実践での応用を意図するM-GTAは，本研究の分析方法として適しているといえる。

M-GTAは，分析焦点者と分析テーマを定め，分析を進める。本分析では，分析焦点者を「一時期行動問題が激しかったが，現在は比較的状態が安定している，知的障害があり行動問題があるASDの子どもを持つ母親」とし，分析テーマを「知的障害があり，行動問題があるASDの子どもを持つ母親の子どもへの関わり方変容プロセス」とした。

Ⅲ　結果

生成した概念は『　』，サブカテゴリーは〔　〕，カテゴリーは【　】，コアカテゴリーは《　》，語りの引用データは「　」で示す。はじめに分析結果全体を，分析結果図（Fig. 1）とストーリーラインを用いて示す。

知的障害があり行動問題があるASD者への母親の関わり方プロセスは，《子どもに必要な関わり方が分かっていく》プロセスである。母親は子どもが小さな頃から，【無我夢中で関わ】ってきた。母親はずっと，子どもの『行動の激しさに当惑し』ており，〔専門的意見を欲〕し，〔特性に合った方法を見出そうと（する）〕しながら，【子どもに合った対応を追求する】。また，〔子どもが安定する手立てを講じ（る）〕，〔成功のための用意周到〕を行うことによって，【子どもが安心する対応を理解していく】。この，【子どもに合った対応を追求する】と【子どもが安心する対応を理解していく】を何度も繰り返すことによって，【子どもに合った対応を認識していく】。その一方で，子どもの『行動の激しさに当惑する』ことは全て無くなることはなく，【所属機関に理解を求め（る）】，【状態改善への渇求】をする。しかし，すぐに改善することはなく，【子どもに合った対応を追求する】，【子どもが安心する対応を理解していく】，【子どもに合った対応を認識していく】という《子どもに必要な関わりが分かっていく》を何度も何度も繰り返すことによって，【生活しやすさを培う】に至る。また，これらは，【拠り所がある】に下支えされていた。

次に見出したカテゴリーごとに，分析結果を説明する。語りデータは，文脈を壊さない程度に読みやすいように一部加筆修正している。

1．【無我夢中で関わる】

母親は子どもの行動が危険であったり，母親と離れることを嫌がるため，子どもが小さな頃より，ずっと『密着して過ご（す）』してきた。

「歩けないような子が，タンスとかによじ登るんですよ。…（中略）…目が離せない，危ない，

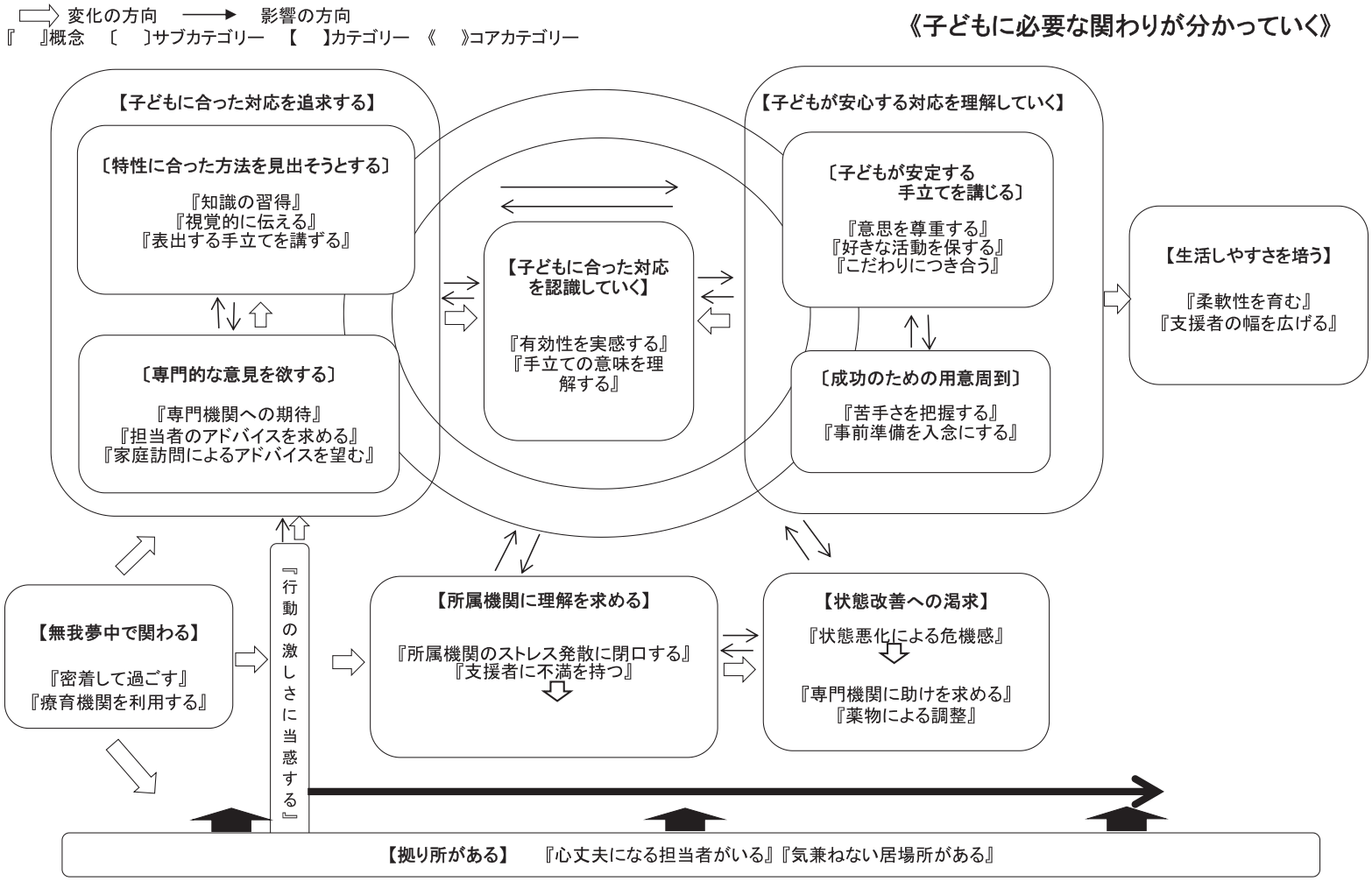

Fig.1　知的障害があり、行動問題がある自閉症者への母親の関わり方プロセス研究　結果図

怖いっていうのが，小さい時の育てにくさっていったらそこです」「365日，24時間，上の子に対してはベッタリでしたね」

そして，「母子通園に通いました。あの子は2歳8ケ月で診断受けたんですよ。それが1月か2月だったので，その年の5月から3月末まで。」との語りのように，かかりつけ医や行政等を通じて専門の医療機関を受診し，『療育機関を利用する』ようになる。

このように母親は，子どもが示す，対応が難しい行動の理由は何なのか分からず，子育てに明け暮れている。また，周囲から勧められて，療育機関の利用を開始するこの時期は，自閉症に関する知識がなく，【無我夢中で関わ（る）】っているといえる。

2.『行動の激しさに当惑する』

子どもが療育機関を利用し始める頃になると，母親は子どもの行動問題が激しいため，どのように対応すればよいのか分からず途方に暮れる（『行動の激しさに当惑する』）ようになる。

「パニックだらけ，すごかったです。いつもいつも連絡帳に，今日のパニックはこんなだったですって，長々と書いてましたね」「通園に来る頃は相当困ってました。…（中略）…私にしがみついて降りないんですよ。それから，かんしゃくを起こしだすと止まらない，泣き叫ぶ，暴れる」

行動問題は子どもが幼児期の頃からみられ，年齢的な成長と共に形を変えたり，激しくなったり，落ち着いたりする。そのため，「スケジュールを入れたからこだわりとか問題行動が軽減はしたけど，無くなったわけじゃないから」と語るように，母親は子どもの状態が比較的安定している時でも，全く安心しているわけではない。

3.【子どもに合った対応を追求する】

『行動の激しさに当惑（する）』している母親は，日々子どもの対応に追われており，「（私が）追い詰められてて，かんしゃくがひどいので」との語りのように，精神的にかなり疲弊している。そのため，「小学校の1年生から3年くらいまでですかね。最初は2週間に1回行っていた」と語るように，児童発達支援センターや学校とは別に，個別療育を行う専門機関に通うことで，子どもが成長することを期待する（『専門機関への期待』）。また，子どもが通っている児童発達支援センターや学校，相談機関の担当者に相談し，アドバイスを求める（『担当者のアドバイスを求める』）。

「（子どもは）どこかに連れて行かれるのかが恐怖だったんです。で，家から出て車に乗る時に泣く，それが毎日だったので。それを先生に相談した時に，行く先々が決まったところがある場合は，バッグを変えたらどうですかっておっしゃっていただいて」

そして，「私だったら，今の状態を他の人に少し見てもらいたいっていうのがあるんですよね。…（中略）…この状況なんよねっていうことを一緒に見てもらって，話しを聞いてもらえるのが一番いいと思うんですけど」と，母親は『家庭訪問によるアドバイスを望む』。このように母親は，子どもが示す行動問題に対して，どのように関わってよいのか分からないため，子どもの所属機関や専門機関にアドバイスを求めていた（〔専門的な意見を欲する〕）。

その一方で，「（学習会には）相当行ってました。知っていることでも，そうよねって聞いて確認できることとかが，自分の中でやっぱりうれしかったりとか。勉強したいのもあったし」と語るように，学習会等に参加し，自閉症の特性や具体的な対応方法等を学ぶ（『知識の習得』）。そして，母親が学習会や他の母親から得た，自閉症児者に有効といわれている視覚的な支援を用いて，わが子に伝えるようになる（『視覚的に伝える』）。

「そういう簡単なことでもいいから，取りあえず視覚で示すといいんだなって思って，自分でも取り組みだして，何となく。バッグを変えるのも視覚だし，本当に何となく自分で」「最初はスケジュールを本当にするだけって感じで，まだ私も理解がよくできてなかった気がするので。取りあえず写真をパッパッパって貼って」

また，「発信するから，それに答えるにはどうしたらいいかなっていうのと，…（中略）…言っていることが理解不能でうまく伝えてこなかったりするから，字で書いたらどうだろうって思って。小さなホワイトボードをスケジュールの横に置いてあげて」との語りのように，母親は自分から伝えるだけではなく，子どもからの発信を理解したいと思い，『表出する手立てを講ずる』よう

になる。

このように母親は，試行錯誤しつつも〔専門的な意見を欲（する）〕し，〔特性に合った方法を見出そうと（する）〕しながら，【子どもに合った対応を追求し（る）】ていた。

4．【子どもが安心する対応を理解していく】

【子どもに合った対応を追求する】一方で母親は，「それで無理やり車に詰め込んで，…（中略）…グッタリして，その日泣いてですね。もう行かないって」と語るように，子どもの意思と違ったことを一方的に行うと，子どもの状態が悪くなることを経験している。そのため，子どもが発信する『意思を尊重する』ようになる。

「今日は何々です，明日は何々です，金曜日は何々ですって言うので，叶えられるものはそれにして」「私のところに来て，お母さん，Yって言うんですよね。Yが何かって言って。Yって何回も言うから，Yに行きたいの？って聞くと，うんって言うから（Yに行くようにした）」

また，「本人は一番したいのは食事をしたいわけじゃなくって，お父さんの車でどっかに行きたいわけです。だから，分かった，お父さんが帰ってきたら，夜買い物に行きましょう。買い物だったらOK」や「歌とか音楽が好きなので。好きな曲をこれこれって言って，ヘルパーさんに入れてもらって聴く」との語りのように，子どもが安定するためには好きな活動があることが大事だと思い，『好きな活動を保する』ようになる。

さらに，ある物事に対して子どものこだわりが非常に強く，子どもが分かる方法で説明しても納得しないため，子どもが諦めるまで待ったり，つき合ったりする（『こだわりにつき合う』）。

「祭日や台風で学校がない日も，こなさないといけないスケジュールだから，連れて行けって大暴れするような感じで。閉まっている学校に連れて行って，入れないよって示したことも何回もあります」「本人が飽きるまで聞くんやろうって。飽きたら次のにしようかって思うかもしれないし。延々とこれかもしれないけど，本人がこれがいいって言うんならいいやろうって。口出ししてないですね」

このように母親は，それまでの子育ての中で必要と思われる〔子どもが安定する手立てを講じ（る）〕ていた。

また，「声が大きいとか，急に声をだすとか，急にバッと動く子も苦手」や「拒否権って示したことが一度もなく。嫌だろうがしないといけないことは，彼にとってしないといけないことで。それを止められるのが嫌なので」との語りのように，母親は子どもを育てていく中で，家庭や学校，その他の場面で，子どもは何が苦手なのかを把握していく（『苦手さを把握する』）。

その上で，母親は今までの子育て経験から，子どもの安定のためには成功体験が重要だと理解している。そのため，子どもが苦手と思われる事象に対して，事前準備を入念にするようになる（『事前準備を入念にする』）。

「式典が鬼門なんです。写真も撮らせてほしい，教室も見させてほしい，スケジュールも作るからってお願いして」「不安が私の方が強かったからですね。でも，スケジュールで私が，いつからKに行きますよとか，いつからここに行きますよとか，担当は誰ですよとか，してあげてたからですね」

このように母親は，子どもが新しい環境に変わる時や苦手と思われる事柄に対して，失敗しないように用意周到に準備していた（〔成功のための用意周到〕）。

この〔子どもが安定する手立てを講じる〕と〔成功のための用意周到〕を繰り返す中で，母親は【子どもが安心する対応を理解していく】ようになる。

5．【子どもに必要な対応を認識していく】

母親は，自閉症に適していると言われている対応を行うことで，子どもの様子が良くなっていくため，『有効性を実感する』ようになる。

「先の見通しがつくようになったので，混乱は減りました」「やり取りがうまくいくようになった頃から，ことばの発信が増えだしたんですよね。ことばも出ますね。しっかり伝わってきますね」

そして，「TEACCHをしだした時の変化は，私には大きかったんですよね。スケジュールっていうことばよりも，生活の見通しっていうのがこんなに大事なのかって，そう思いましたね」「絵カードを使って万人に分かるように，親だけじゃなくって誰でも分かるようにっていうところと，

構造化って意味とかスケジュールの意味とかを，改めて教えてもらったと思います」との語りのように，母親は自ら実践することによって，学習したことや支援者が行う子どもへの『手立ての意味を理解する』ようになる。

そして母親は，「日々，これがいいんじゃないか，これがいいんじゃないかって，勉強会に行く度に。全てを習得って難しいんですけど，この中でこれならわが子のレベルに合うんじゃないかな，こうしたらいいんだって，少しずつ変化していって」と語るように，段々と【子どもに必要な対応を認識していく】。

6.【所属機関に理解を求める】

母親は，【子どもに合った対応を追求（する）】し，【子どもが安心する対応を理解していく】一方で，『行動の激しさに当惑する』ことが無くなることはない。その上，所属機関でストレスがあると家で状態が悪くなるため，対応に非常に困ることも少なくなかった（『所属機関のストレス発散に閉口する』）。

「利用者の女の人から，そこはいっちゃだめって怒られたみたいなんですよ。…（中略）…車の中で後ろから足でバンバン蹴って，ギャーって言って」「家に帰ったら，私の顔見た途端に顔色変わって，…（中略）…うち帰ってパニック起こしてますけど，事業所で何かありましたかって聞いたら，えっそうなんですかって言われる」

このようなことが続くと，「普通の感覚で，子どもたちに教えたり怒ったりするんですよ。違うでしょって，ここ違うでしょっていうことが，分からない人がいましたね」や「これって事前に伝えていたんですかねって言ったら，もちろん伝えることはなく」との語りのように，母親は『支援者に不満を持つ』ようになる。

そして，子どもの調子が悪く，母親や家族も対応が大変であるため，所属機関に適切な対応を取り入れてもらいたいと交渉する（『適切な対応を交渉する』）。

「何回も説明するんですね。手紙を書いたりとか。ちょっとこういうことは苦手なので，声をかけないでもらいたいですとか。」「こういうスケジュールでって，担任の先生にすごーく細かく提示してお願いして」

このように母親は，子どもが通っている学校や福祉サービス事業所等の【所属機関に理解を求める】。

7.【状態改善への渇求】

しかし，母親がいくら【所属機関に理解を求め（る）】，家庭の中で子どもへ様々な対応を行っても，子どもの状態が悪く，改善の見通しが立たないため，この先どうなるのかと危機感を持つ（『状態悪化による危機感』）ようになる。

「目を瞑ったり，息を止めたり，唾を吐いたり，夜中に大声を出したり，同じことばを繰り返すってことがあって。…（中略）…これでは自分達ではどうしようもないなって」「体が大きくなるから力も強くなって，私の力じゃ抑え込めない。今度は主人が抑え込んで，２～３時間，二人で耐えてる。ずーっと，そんなのが続いてて。これはどうにもならないなーって思って」

そのため，「子ども自身が不安になって。それで夜寝なくなったり，主人に対しての暴力っていうのが出てきたので，それで相談に行ってみようかって」や「ここしか来るところないし，先生助けてくださいって言った」との語りのように，母親は子どもの行動問題への対応が非常に難しいため，『専門機関に助けを求める』。

また，専門機関等から紹介された医療機関や，小さな頃からの主治医に相談し，薬物による調整を行う（『薬物による調整』）。

「うちもたくさん薬を飲んでますけど。行動障害があるたびに，薬の相談は主治医にしています」「先生に相談して，すごいこだわりと寝ないのはどうにかなりませんかって」

このように母親は，子どもの状態があまりにも悪く，子ども自身も辛そうに思え，家族も疲弊しているため，子どもの状態がどうにか良くならないかと強く願望する，（【状態改善への渇求】）。

8.【拠り所がある】

母親は，子どもが通う療育機関等で，親同士の繋がりができるようになる。また，勉強会に通ったり，市内にいくつかある発達障害の親の会に入会することもある。

「ここで変な行動をしても誰も咎めないし，正直そんな子ばっかり来てるんで。何も気にせずに

唯一過ごせる時間だったので，私の心の支えではあったと思います」や「毎月保護者会してくれるんですけどね，出席率ほぼ100％。みんな途中から，ここに来るの楽しみだよねって」との語りのように，親同士でお互いの大変さに共感し，『気兼ねない居場所がある』ことが，母親の支えになっていた。

また，子どもや母親の大変さや悩み等を理解し，寄り添ってくれる担当者がいることが，母親を心丈夫にしていた（『心丈夫になる担当者がいる』）。

「先生たちが私たちに寄り添ってくれたこと（が一番よかった）」「私が当たった先生は結構いい先生だったと思うんですよね，話を聞いてくれたりとか。話がしたいですって言ったら，時間を取って下さる先生ばかりだったので」

このように，【拠り所がある】ことが，「特効薬っていうのはなかったんですけど，とにかく先生は聞き役に徹してくれた」や「子どもたちは大変だったんだけど，大変だ大変だって言いながらも，愚痴をこぼしながらも励まし合ってきた」との語りのように，行動問題への対応で疲れ切っている母親を下支えしていた。

9．【生活しやすさを培う】

母親は，【子どもに合った対応を追求する】，【子どもが安心する対応を理解していく】，【子どもに必要な対応を認識していく】を繰り返し繰り返し行い，子どもの様子が段々安定していくと，一緒に生活していく上で子どもや周囲が困らないように，子どもが物事に対する柔軟性が育つように関わる（『柔軟性を育む』）。

「叶えられないものってありますよね。そんなに何々って言われても…（中略）…何って今は決めていなくって，その時にお母さんが出すオヤツって。ちょっとアバウトな部分も入れたいので」「ヘルパーさんがないお泊り，ただ泊まるだけもさせたいんです。何かがあって預ける時に，いつもヘルパーさんが連れて行ってくれないんだよ，っていうのもしたいので」

また，「私ではないヘルパーさんと，バスとかJRとか公共交通機関を使って外に出て頂くっていうのを，小４からしていて。今も必要かなと思っているので」や「今，R倶楽部って，事業所の先生がしているのに入れてもらってるんですけど」との語りのように，母親は子どもの将来の生活を考えて，ヘルパー等支援者と一緒に活動する機会を作り，子どもが家族以外の人と行動できるようにする（『支援者の幅を広げる』）。

このように母親は，人や物事に対するこだわりが強く，臨機応変な事柄が苦手なわが子に対して，将来の生活に向けて，少しずつでもよいので柔軟に生活していける力を培うように関わっていくようになる（【生活しやすさを培う】）。

Ⅳ　考察

本研究は，一時期行動問題が激しかったが，現在（インタビュー当時）は比較的状態が安定している，知的障害があり行動問題があるASDの子を持つ母親へのインタビューを通して，母親の子どもへの関わり方の変容プロセスを明らかにすることが目的であった。M-GTAによる分析の結果，以下の点が明らかになった。

１点目は，母親の子どもへの関わり方プロセスは，《子どもに必要な関わりが分かっていく》プロセスであるといえる。《子どもに必要な関わりが分かっていく》とは，子どもの『行動の激しさに当惑（する）』していた母親が，【子どもに合った対応を追求する】，【子どもが安心する対応を理解していく】，【子どもに必要な対応を認識していく】を繰り返し行うサイクルであった。先行研究において李木（2003）[10] は，母親は子どもが示す行動の意味に気づき，それまでの子育ての方法を変えようとしたことを報告している。また，鈴木ら（2015）[11] は，母親は子どもを取り巻く問題が生じた場合に，適切な対処を導き出すために活用される資源のひとつとして，特徴理解があることを報告している。本研究結果の〔特性に合った方法を見出そうとする〕と〔子どもが安定する手立てを講じる〕は，これらの先行研究と近似しているといえる。しかし，本研究結果からはさらに，母親は子どもが示す行動問題への関わり方について，専門家にアドバイスを求めていた（〔専門的な意見を欲する〕）ことと，子どもが新しい環境に変わる時や苦手と思われる事柄に対して，失敗しないように事前準備を周到にしていた（〔成功のための用意周到〕）ことが明らかになった。また，【子どもに合った対応を追求する】，【子どもが安心する対応を理解していく】，【子どもに必要な対

応を認識していく】を繰り返し行っていくことによって，【生活しやすさを培う】に至っていた。

2点目は，《子どもに必要な関わりが分かっていく》はすぐにうまくいくものではなく，【所属機関に理解を求める】や【状態改善への渇求】を行ったり来たりしながら，繰り返し行っていた。また，それは，【拠り所がある】に下支えされていることが明らかになった。先行研究において李木（2003）[10] は，「(母親は）専門家にも協力を求めようとしたが，うまくそれができなかった。専門家とのよい関係が作れた時期には，子どもにも成長が認められた。」と述べている。また，鈴木ら（2015）[11] は，母親が困った時に助けてくれる人や受容的態度で接してくれる人の存在が，母親の養育レジリエンスの構成要素の一つであると報告している。本研究においても，母親は【所属機関に理解を求める】や『状態悪化による危機感』を経験するたびに，また《子どもに必要な関わりが分かっていく》がうまくいかないたびに，怒り，焦り，時には絶望感に襲われるが，『専門機関に助けを求め（る)』たり，【拠り所がある】ことで，どうにか気持ちを保っていた。【拠り所がある】ことは，子どもが示す行動問題への対応に疲れ果て，所属機関に対して不平不満がある母親にとって，《子どもに必要な関わりが分かっていく》を継続することを可能にしていたといえる。

V　まとめ

本研究結果を踏まえ，支援の提言を述べる。

1点目は，『行動の激しさに当惑する』母親は，〔専門的な意見を欲する〕。そのため，担任や担当者は，知的障害があり行動問題があるASD者への指導・支援方法を習得しておくことが必要である。2点目は，母親は，【拠り所がある】ことに下支えられていた。そのため，担任や担当者は，母親の大変さや悩み等を理解し，寄り添うことが重要である。また，親の会や親の集まり等，母親に『気兼ねない居場所（がある)』を情報提供することである。3点目は，《子どもに必要な関わりが分かっていく》はすぐにうまくものではなく，【子どもに合った対応を追求する】，【子どもが安心する対応を理解していく】，【子どもに必要な対応を認識していく】を繰り返し行うサイクルであった。そのため，すぐに結果が表れるものではなく，何年もかかることを認識しておくことが必要である。また，担任や担当者ひとりで抱え込むのではなく，『薬物による調整』やより専門性の高い専門家の存在が必要な場合もあることを認識しておくことが必要である。

文献

1）安達潤・古川宇一（2003)：自閉症児の家庭生活トラブルを軽減するための支援―養育者の問題対処能力を上げる働きかけを通じて―．北海道教育大学教育実践総合センター紀要，(4)―(6)，33－41.

2）藤原義博・平澤紀子（2001)：問題行動を示す発達障害児者への本人や家族を中心とした家族支援―包括的な行動的支援からの貢献と課題―．上越教育大学研究紀要，第21巻，第1号，153－162.

3）河内なぎさ・河内哲也（2015)：家庭で過剰な要求を示す自閉症スペクトラム症児へのPECSの活用―育児支援を必要とする母親への指導を通して―．臨床発達心理実践研究，第10巻，52－58.

4）木下康仁（2007)：ライブ講義M-GTA－実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて．弘文堂.

5）前田久美子・佐々木銀河・朝岡寛史・野呂文行（2017)：行動問題を示す自閉症スペクトラム児の母親に対する行動記録を用いたコンサルテーション―効果的な記録様式と変容過程の分析―．特殊教育学研究，55(2)，95－104.

6）村本浄司・園山繁樹（2009)：発達障害児者の行動問題に対する代替行動の形成に関する文献的検討．行動分析学研究，23, 126－142.

7）岡本邦弘（2015)：行動問題を示す発達障害児をもつ保護者と教師との効果的な連携方法の検討．兵庫教育大学大学院連合学校教育科.

8）岡村章司（2016)：高いストレスをもつ保護者による行動問題を示す自閉症児への家庭での介入を促す支援方略の検討―強みに基づくアプローチを通して―．特殊教育学研究，54(4), 257－266.

9）末永統・小笠原恵（2012)：発達障害児の行動問題と競合する適応行動に対する自己管理

手続きの検討．特殊教育学研究，50(3)，269－278.
10）李木明徳（2003)：自閉症の子どもの行動障碍と子育て－乳幼児期から児童期までの子育てに関する母親の語りから－．広島文教女子大学紀要，38，129－141.
11）鈴木浩太・小林朋佳・森山花鈴・加我牧子・平谷美智夫・渡部京太・山下裕史朗・林隆・稲垣真澄（2015)：自閉症スペクトラム児（者）をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究．脳と発達，47，283－288.
12）竹井清香・五味洋一・野呂文行（2009)：機能的アセスメントに基づく自閉症スペクトラム幼児とその母親に対する家庭内支援―注目によって動機づけられた行動問題への効果―．障害科学研究，33，13－24.
13）上野 茜・野呂文行（2011)：機能的アセスメントに基づく自閉性障害児に対するトークンシステムを用いた家庭内支援に関する検討．障害科学研究，35，197-208.
14）柳澤亜希子（2012)：自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性．特殊教育学研究，50(4)，403－411.